漢文における書くことの指導

長谷川　滋成

本稿においては、私の漢文学習指導から、書くことの指導を拾いあげ、その一端を記すことにする。

一

漢文は、学習指導要領が実施された戦後においては、国語科の中に一科目として組みこまれ、爾来、今日に至っている。

ところが、漢文は国語科の一科目であり、国語教育の一分野を担当しているという事実を、指導者もまた学習者も忘れているのではないか、と思うときがある。というのは、漢文は国語の力をつける科目ではなく、英語と同様な外国語として意識されているのではないか、と思うときがあるからである。

一人の指導者が、現代国語の授業と漢文の授業とに対するとき、学習指導方法や目標を変えてはいないだろうか。計画的・意図的な変更であれば、それなりの意義もあるが、何の配慮や反省もなく変えてはいないだろうか。現代国語には現代国語の、漢文には漢文の学習指導の一つの型を作ってはいないだろうか。

現代国語では、文章構造を分析したり、作中人物の心情を互いに比較したり、作者の考え方に批判を加えたりするが、漢文ではあまり多くなされてはいないのではないだろうか。まして、読後感想文や鑑賞文を書かせたり、創作させたりするということなどは、きわめて少ないのではないだろうか。

二

学年当初、第一単元「漢文入門」に続き、第二単元として「春夏の詩文」を設定した。とりあげた教材は、順に高啓「尋胡隠君」孟浩然「春暁」杜牧「江南春」李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」王維「送元二使安西」杜甫「絶句」「春望」李白「春夜宴従弟桃花園序」高駢「山亭夏日」蘇軾「望湖楼醉書」の九詩一文である。単元目標は四つ掲げ、その第三に、「詩情やその内容を短いことばで要約させる」を置き、書くことの目標とした。本目標を具体化するために、二つの方法を用いた。

その一つは、詩題・時代・姓名・字・形式・韻字・詩情・内容の八項目を書きこんだプリントを使用し、「尋胡隠君」の例（明。高啓。季迪。五言絶句。花・家。自然。心のおもむくままに花や水に誘われて、そよ吹く川べりを歩き、春の情趣と一体融合した、のどやかな心情がうたわれている。）にならって、「春暁」以下の空欄に書きこんでいくものである。「時代」から「韻字」までは知識の確認であり、「詩情」は主題の読みとりであり、「内容」は漢字の表

意性、作者の心情・状況を読みとって六〇字前後でまとめるものである。

以下、「江南春」「春望」「春夜宴従弟桃花園序」の学習結果を一つずつ紹介する。

「江南春」　N・Fくん

唐。杜牧。牧之。七言絶句。紅・風・中。自然。広々とした江南ののどかな風景を、視覚・聴覚からとらえ、また、晴から雨、現在から過去への変化をつけて、巧みにうたっている。

「春望」　N・Sさん

盛唐。杜甫。子美。五言律詩。深、心、金、簪。戦争。花や鳥にまでも涙を流し、国を愛する杜甫の気持ちがよく表われている。人と自然とをうまく対比させた、人の心をひきつけるすばらしい詩である。

「春夜宴従弟桃花園序」　S・Kくん

盛唐。李白。太白。?。なし。人生・春の夜、短くて、はかない人生を歓を尽くして楽しもうという詩で、一回きりの人生を意義深く、積極的に、しかも充実したものにしようとする明るさがある。

知識の確認のうち、杜牧は晩唐とするのがよく、李白の文章の形式は、四六駢儷体であることを、これを利用して指導するとよい。また、詩情および内容の把握は、それなりに読みとっているが、「春望」の内容には鋭さに欠けている。構造および詩情からのきりこみがほしい。

この単元におけるもう一つの書く作業は、九首の詩のうち一つを選んで、訳詩することである。訳詩であって、口語訳ではない。形式は、定型・自由は問わないが、詩の心を大切にして、自分のことばで訳す。春の詩七首のうち三首の訳詩を一つずつ掲げる。

尋胡隠君　Y・Kくん

春のうららかな陽ざしの中
いくつもの
小川のせせらぎをこえ
あたり一面の花をながめつつ
川辺のみちを
さわやかな春風に誘われて
いつのまにかあなたの家

やや稚拙にみえるが、原詩の底流にある詩情を第一行に要約し、第六行とちゃんと関連させている。また、原詩の起句承句の反復表現を第二行で一括し、第四行の句末に「つつ」を補って、これと呼応させている。第三行の句末に「つつ」が置かれていないのは、故意にであろうか。

黄鶴楼送孟浩然之広陵　T・Fさん

広陵よりして西の彼方
ここ黄鶴楼に別れを告げ
春霞に浮く美しい花を
残して揚州へ下る君よ

寂しい帆走も次第に遠く
見晴かす青空に吸い込まれ

影のみを残す

ああそして揚子江が
天の果てに至るかの如く静かな
静かな流れをたたえ
今はただ私の瞳の奥深く
君の微笑(ほほえみ)を映すのだ

リズミカルな訳詩とは必ずしも言えないが、計算されている。たとえば、四行の原詩を三連に変形しているし、転句と結句とを切り離している点である。起句承句を四行の第一連とし、転句を三行の第二連とし、結句を五行の第三連としている。

この形式の変化は、内容の変化ともかかわっている。つまり、起句承句は事実の表現だから短くてすむが、転句結句は心情の描写だから長くなっている。「今はただ」以下の二行は、訳詩者自身の感慨である。原詩に忠実ではないが、自己と作品とを密着させた、表現読みの一型であろう。

絶句　　F・Yさん

川の流れは　変はらねど
水の色は　深さを増す
碧瑠璃の　水面に
天舞ふ鳥の　姿は白し
遠く連なる　山々の
青く若葉の　萠え出づる
咲き誇る　春の花の色
紅く映りて　いと美し
春は再び　巡り来ぬ
しかして我は　帰りえず
ああ
いつしか　故郷の土を踏まむ

明るく充実した春をうたう原詩の起句承句の二句を八行に引きのばしている。全体の三分の二の割合を占めている。この訳詩者は、人間存在のはかなさをうたう転句結句よりも、はかなさを一段と浮きたたせている、充実した、悠久の自然をうたう起句承句に心を奪われたようである。転句結句をわずか四行で表現したということは、訳詩者が却って人間のはかなさを深刻に受けとめているとも考えられる。五音・七音を基調にして、文語表記ではあるが、平易な語彙・表現が原詩の内容を巧みにとらえているといえよう。

三

第二学期の最初の単元は、第四単元「史伝の文学」である。とりあげた教材は、司馬遷『史記』より、「鴻門之会」「四面楚歌」の二場面である。前者は、「沛公旦日従百余騎、来見項王、至鴻門。」より「沛公至軍、立誅殺曹無傷。」まで、後者は、「項王軍壁垓下。」より「乃自刎而死。」までの範囲である。

第二学期の第一時は、夏期休暇の課題であった「鴻門之会」の復習であり、第二時より「四面楚歌」の読解・鑑賞の授業である。本単元の目標四つのうち、「項羽・沛公等の人物論を書かせる」が、書くことの課題である。項羽論・沛公論・樊噲論・張良論・范増論

の五つを用意したが、項羽論が圧倒的に多かった。そのうちの一つをとりあげる。字数は、四百字詰原稿用紙三枚以上五枚以内である。

項羽論

T・Hくん

「唉、竪子不足与謀。」—沛公を鴻門の会の場から逃がしてしまった項羽を、その亜父范増がののしった言葉である。長い間の放浪の末、項羽に仕え、天下を夢みていた范増にとって、まな板の鯉となった沛公にとどめを刺さなかった項羽は、このうえもなく愚かな大将にみえたのであろう。

しかし、項羽は全く無能な人間だとは、僕は思わない。いや、無能な人間であるわけはないのだ。秦の滅亡後の権力闘争の中に、沛公とともに最後まで残り、一時は天下を掌中に収めかけたという、その歴史的な事実がその一つの証拠であろう。

では、この『史記』項羽本紀中の「鴻門之会」「四面楚歌」のどこに項羽の才器が表われているのであろうか。

「范増数目項王、挙所佩玉玦、以示之者三。項王黙然不応。」という場面がある。ここで、項羽はどうして范増の〝沛公を殺せ〟という指示に従わなかったのであろうか。——僕はこう思う。沛公は秦の咸陽を陥落させた。秦の悪政に耐えきれずにいた民衆は、文句なしに彼を支持したであろう。その沛公を、少数の兵しか率いずに陳謝に来たその場で殺すのは、だまし討ちと同様であり、民衆の項羽に対する信頼度は落ちたであろう。それよりも、機を見て、正当な口実のもとに討たねばならないと、項羽は考えたのだと思う。項羽が絶対こう思ったのだと断言することはできないが、一軍の将として、また一国の統治者になろうとする者として、秦の前例を知る項羽が、范増とは違った立場で事を運ぼうとするのは、当然だと思うのである。

その後、項羽は、せっかく手に入れた咸陽を略奪、暴挙を重ねたのち捨て、手柄のあった諸将を王侯に封じ、あげくの果てには自ら奉じた義帝を殺してしまう。この失敗は、その後、彼の命とりになってしまう。それではなぜ、一時でも天下を掌中に収めかけた彼が、どうしてこのようなへまをしでかしてしまったのであろうか。——僕はこう考える。咸陽陥落において、項羽は沛公の実力を目のあたりに見せつけられた。亜父范増も言うように、沛公は項羽にとってかわる可能性を十分もっている。いや、そればかりか、沛公の方が自分よりも統治者としての才器に長けていることさえ、項羽にはわかっていたのかもしれない。彼はあせったのであろう。沛公が動き出さぬうちに、わが天下を確立してしまおうとして。そこで、彼はあせったのであろう。沛公が動き出さぬうちに、わが天下を確立してしまおうとして。そこで、彼はあせりすぎてしまった。〝自分の権力を確立すること〟とは、自ら西楚の覇王と称していばりちらすことでも、義帝を殺してしまうことでもない、ということに彼は気づかなかった。いや、気づけなかったのであろう。

「四面楚歌」の中に、項羽が落ちぶれて烏江の亭長に江東へ行くことを勧められる場面がある。「願大王急渡。」と言ってくれる亭長に対し、項羽は、「天之亡我、我何渡為。」と答える。引き連れていった多くの部下を残らず死なせてしまった彼は、江東

の父兄に面目がないと言った。この場面、および虞美人に涙を流す場面、それに最後の呂馬童のために自らの首をかき切って死ぬ場面、以上三つの場面には、項羽の〝男らしさ〟が描かれている。僕は項羽という人間に対して、深い知識はもたない。にもかかわらず、〝項羽は愚将ではない〟と言えるのは、この三場面からである。彼が虞美人に流した涙は、自らの命が風前の灯となった時でも、自分の愛する人の身を案ずるという、〝男の優しさ〟の象徴である。自ら首をかき切った彼の姿は、〝追いつめられた人間の強さ〟であるばかりでなく、「天之亡我」、すなわち自分は歴史の流れに召されていく、自分の死を時の流れが必要としている、ということを悟った人間の雄姿である。

司馬遷という一人の人間が著わした文章を、また一人の人間が読んで書いた項羽論であるから、事実とは違っていようが、僕は、項羽は全く無能な人間だとは思っていない、と考えている。

項羽論は、読後感想文を書くのではなく、項羽を「論」じるのである。したがって、主観を排除し、客観的事実によって論を組みたて、説得力のある文体、構成でなければならない。

右の項羽論は、文節関係・文章表現・句読点のうち方の面で推敲を要する個所があるが、読後感想文の域を出て、「論」を書こうとする意欲をみせている。その最も端的な個所は、冒頭に、「項羽は全く無能な人間だ とは、僕は思わない。」という結論を示し、第四段落以下の三つの段落で具体的な場面をとりあげてその論拠を示し、最後の段落でもう一度、「僕は、項羽は全く無能な人間だとは思っていない、と考えている。」と結論していることである。いわば、双括式の構成によって、論を展開しているのである。ただ、本論に述べた論拠がやや弱いうらみがある。その指導はあらためてなされなければなるまい。

なお、本論中に、「鴻門之会」「四面楚歌」以外の場面をとりあげているのは、課題の提出された夏期休暇中に『史記』に関する参考書を読んでいるからである。

四

「史伝文学」に続く、十月末からの第五単元は「秋冬の詩」である。杜牧「山行」張籍「秋思」李商隠「夜雨寄北」李白「蛾眉山月歌」李白「子夜呉歌」杜甫「月夜」「登高」岑参「胡笳歌、送顔真卿使赴河隴」柳宗元「江雪」高適「除夜作」の十詩をとりあげ、書くことの単元目標としては、「作中の人物にかわって心情を表現させる」をとりたてた。

「作中人物にかわって心情を表現させる」方法としては、このたびは、たとえば「夜雨寄北」詩ならば、生徒が詩中の「君」にかわって「君」の心中を言い表わし、また、「江雪」詩ならば、詩中の「翁」にかわって「翁」の思いを書かせることにした。この方法によって書くことは、作中の人物にどれほどなりきれて、主観的・感情的な作品を作りあげることができるか、ということになる。字数は八百字前後である。

次に示すのは、杜甫の「月夜」の詩にうたわれる妻になりかわって書いた、妻から夫への書簡である。詩の「月夜」は、いま賊軍に囚閉されている杜甫が、安禄山の乱を逃れて鄜州羌村に疎開させて

いた妻子を思いやって書いた絶唱であるといわれている。

夫へ　　M・Tさん

私も、あなたのことを思いつつ、あの明るく美しい月をながめているのです。月の光は、まるで私の哀しい心をいやしてくれるかのようです。そうして、しばらくすると、月の表面に、ぼんやりとあなたの姿をみることができるのです。だから、少しも冷たくなんかありません。心配しないでくださいね。私は、あなたの姿のみえる限り、ひたすら、あなたのご無事を祈っているのです。

あなたも、長安で、同じこの美しい月をながめていることでしょう。だから、私は「長安の月よ、私の一番美しい姿を映してください！」とお願いしているのです。たとえ遠く離れていても、こうして同じ時を過ごせることが、今の私の一番の幸福なのです。

けれども、月に映るあなたの姿は、鋭い光によってすぐに消されてしまうのです。私はまた次の月夜まで、さびしい時を過ごさなければならないのです。

子供たちは、今、私のそばで、小さな寝息をたてています。私のさびしい心がわかるのか、私が涙を流していると、みな私の回りに寄ってきて、いっしょに泣いてくれるのです。それがまた悲しくて、早く父親の腕の中のあたたかさを味わわせてやりたい、とばかり思うのです。

あなたのいる長安は、どんな都なのでしょうか。これから、どちらへ行かれるのですか。できれば早く、子供たちと私を迎えに、帰ってきてくださいね。その時まで、私は、月夜のひとときを楽しみにして、子供たちと精いっぱい暮らしていきますから。あなたも、お体に気をつけて。一日一日、私たちが近づいていくことを祈っています。

この時の杜甫は四五歳、妻の年齢は不明であるが、長子の熊児が一〇歳前後であることを思えば、三〇歳前後であろうか。

何不自由なく、のんびりと生育した一七歳の生徒には、この年齢の、しかも生と死の境にいる妻の立場になりきることは、とてもできることではあるまい。そういう意味においては、この書くことの課題は、書くために書いていることになるかもしれない。

確かに、当時と現代とでは様子がさまざまに異なろうが、杜甫の妻も生徒もともに人間であるのだから、もの足りなさを残しつつも、一七歳の生徒なりに杜甫の妻の気持ちは理解できるにちがいない。

右の書簡は、そのような意味において、囚われの夫を案じる妻のせいいっぱいの感慨が言い表わされた作品であろう。妻として、自分の置かれた現実を思うとき、「私はあなたの姿がみえる限り、ひたすら、あなたのご無事を祈っているのです」「早く父親の腕の中のあたたかさを味わせてやりたいとばかり思うのです」「できれば早く、子供たちと私を迎えに、帰ってきてくださいね」というのがすべてであろう。「あなたも、お体に気をつけて」―平凡なことばだが、この場合、心からのことばであるにちがいない。

次に示すのは、高適の「除夜作」の詩にうたわれる家族の一人になりかわって書いた、子どもから父への書簡である。詩の「除夜

作」は、異郷にある高適が大晦日の夜、ひとり眠れず、故郷のことや自分の老い先のことを思って、旅愁にうち沈んでいる思いが書かれている。

父へ　　S・Hくん

今日は大晦日。父は、いま、どこで、何をしているのだろう。

最後の便りがあったのは、今年の正月だった。あれからもう一年にもなるが、あの手紙には、「そちらは元気か。自分は元気でいる。今年の暮れには、ぜひ帰りたい。」と手短に書いてあった。

父は、いま、どこで、何をしているのだろうか。

そういえば、父がこの村を出て、もう五年になる。この五年の間に、村の様子もかなり変わった。川向こうの李じいさんが亡くなったし、隣りの趙さんところにはお嫁さんがきて、子どもも生まれたし、山のふもとの張さんの家は焼けてしまった。また、秋祭りは、村をあげての大にぎわいであるが、今年は日でりで作物のできが悪く、食糧にも困った。

わが家も変わってきた。父がいなくなって、力仕事は僕がやることになった。母も朝早くから夜遅くまで、まっ黒になって働いている。弟や妹もよく働いている。けれども、くらしは決して楽ではない。〝税金が高いのだよ〟と、母はこぼしている。そのたびに、母は父を思い出している。それにしても、父の年も四七歳、白髪もだいぶ増えただろう。

父は、いま、どこで、何をしているのだろう。

母のこと、弟のこと、妹のこと、僕のことを、父は思い出してくれているだろうか。今夜は、父のことが次から次へと思い出される。五年間、父と離れて暮らしているが、父はいま、僕たちの生活が少しでも楽になるようにと、大切な仕事をしているのだと思う。僕たち家族だけのことではない。村の人々、国の人々の生活が少しでも楽になるようにと、大切な仕事をしているのだと思う。だから、父が今日、帰ってこないのは、しかたがない。一日も早く、みんなの生活が楽になってほしい。

父は、いま、どこで、何を考えているのだろう。

この書簡は、父が詩を書いた大晦日の夜と同じ時刻に、父にあてて書かれている。「父は、いま、どこで、何をしているのだろう。」という父への強い思いが軸になっているのが、印象的である。村やわが家の様子を記しながら、自分がしっかりしなければならない決意を読みとることができる。父と離れての生活は、現代社会にも往々にしてあることだし、この詩の場合、比較的容易に作中の人物と重なりあえるのかもしれない。

原作の「除夜作」の制作時期やこの時の高適の職務などが不明であるために、生徒は「五年間、父と離れて暮らしているが、父はいま、僕たちの生活が少しでも楽になるようにと、大切な仕事をしているのだと思う。」と創作しているのは、やむを得ない。当時の風俗習慣がもっと明らかにできれば、内容の充実した書簡にすることができるであろう。

五

第三学期は、第六単元の「文章」からはじまった。文章教材とし

て選んだのは、論として韓愈の「雑説」、小説として陳玄祐の「離魂記」、辞として屈原の「漁父辞」である。なお、柳宗元の「捕蛇者説」は冬期休暇の課題であり、「天台二女譚」、白居易の「与微之書」、沈既済の「枕中記」は発展読書教材である。これらの教材を一括した単元目標の一つに「後日談・後続談を創作させる」を用意した。具体的には、「離魂記」をとりあげて、本文の途中までを読ませ、後続談を創作させることにした。

「離魂記」は、宗教的においの強い唐代の伝奇小説である。全文四九一字からなる短編で、生徒が読んだのは、書き出しの「天授三年」から三〇九字目の「遂俱帰衡州」までの範囲である。この間のあらすじは、次のようである。

張鎰の娘の倩娘と、いとこの王宙とはいいなずけで、成長するにつれて互いに思いあう仲になっていた。ところが、鎰の同僚の中の有能な役人が、倩娘を嫁にほしいと言ってきたので、鎰はそれを許した。宙はこれを恨み悲しみ、任官にかこつけて、京へ上った。夜半、宙は岸上に人の足音を聞き、見ると倩娘である。宙は大いに喜んでともに蜀へ行き、五年間滞在して、二人の子どもをもうけた。しかし、倩娘の両親を慕う気持ちと、両親を見捨てた後悔の念とは日増しに強まり、宙は妻子を連れて、鎰のところに帰ってきた。

さて、この続き話を書くことになる。字数には制限はなく、五〇分の授業時間内にまとめることが条件である。次に示すのはその一つであるが、筋書きとして最も多かったのは、倩娘との結婚を約束された鎰の同僚である有能な役人が、王宙に対して報復するという、いわば復讐談である。

J・Hさん

故郷の風は冷たかった。なつかしい家は堅く門を閉ざし、かつて親しんだ隣人たちのとがった視線が、彼らをまごつかせた。声もなく泣いている倩娘の涙にある種の後悔が混じっていることを、宙は次第に悟っていき、そのことが彼を惑わせ、苦しめ、かつ決心させたといっていい。彼は妻子をとどめて立ちあがった。彼の瞳から躊躇のためのかげりが消えた。

まず、彼の訪ねたのは、あの時倩娘に求婚した張鎰の同僚だった。彼は至極複雑な表情で宙を迎え入れて言った。

「私は五年前のことをここで取りあげて恨みごとを言うつもりはない。今私に言えるのは少なくとも、君がもう少し早く帰っていれば、事態はかなり楽だったろうということだけだ。」わけを尋ねると、

「悲嘆にくれて床についておられた張鎰夫人が亡くなられたのは、つい半年ほど前のことだったよ。」

と答える。宙は一瞬茫然としたが、やがて涙をこぼしながら語った。

「私は五年前、わが愛を貫いたつもりで楽観していました。けれども、現に貴方を傷つけ、また故郷も捨てきれずに、中途半端な心持ちでこうして帰郷し、かつまた今、私の身勝手が一人の人の命を奪ったことを知りました。このような私にどうして『愛』云々と語れましょうか。私にできることは、おわび申しあげることだけです。」

こうして宙は、もはやこのままこの地に永住することが困難であることを察し、決意を固くしたのだった。

宙は次に、もっとも信頼すべき旧友の家を訪ねた。友は事の次第を知っていて、温かく宙を迎えて言った。

「君の瞳を見て安心した。君は変わっていない。」

宙は口を開いた。

「私は君の変わらぬ友情に感謝したい。このような様子では、私が衡州に住むことはかなうまい。しかし、ここを去る前に、どうしても父張鎰と話したいのだ。」

しばしの後、友は答えた。

「よかろう、三日三晩、君の妻子三人を私が預かる。しかし、父君の御心を解くことは私にはできない。」

こうして宙は一人張鎰の家の門前に、祈るように坐り続けた。そしてとうとう三日目の朝、隣人たちの冷たい視線がやわらぎ、その中のある者のとりなしで、その夕方、張家の門が開かれたのである。広い邸はひっそりと静かで昔をとどめることなく、張鎰は奥の座敷に一人正座していた。宙は対座した。一時の沈黙が流れた後、張鎰はそっと立ちあがり、縁に向かって今上がったばかりの満月をながめながら、おもむろに言った。

「もし……もしも、今日のうちに隣人の誰もとりなしに来なければ、私は自ら門を開くつもりだった。」

宙がはっとして顔をあげると、静かな月光を浴びて寂しく微笑する父の横顔が、美しくかすんで目に映った。

この後続談は、文章構成・表現技巧・叙述の面からみると、水準以上のものであろう。「故郷の風は冷たかった。」という書き出しは、以下の展開を端的に象徴しており、同様に、「今上がったばかりの満月をながめながら、おもむろに言った。」という書きおさめもきわめて象徴的表現である。また、「もっとも信頼すべき旧友の家を訪」ね、解決の緒を見い出そうとした発想は巧みである。

右の後続談は、一つの完成された作品であるが、最大の難点は、題名の「離魂記」から離れ、「離魂記」を無視していることである。題名に注目し、後続談の中でこれを展開していかなければならない。実はここに、後続談を書くねらいがすえられていたのである。

しかし、現代の高校生に、唐代伝奇小説のからくりを発見させることは、無理なことかもしれない。倩娘の魂と魄とが離れたことを暗示する文が、三〇九字の中に「夜方半、宙不寐。忽聞岸上有一人。行声甚速、須臾至船。問之乃倩娘徒行跣足而至。」とあるのを見破った生徒は、皆無であった。

生徒の書いた後続談の一つ一つを、原作「離魂記」の「既至、宙独身先至鎰。」以下「故記之。」までの一八二字の内容と比較対照させることによって、中国伝奇小説の「奇」の意外性を理解させることもまた、後続談を書くことのねらいでもあった。

六

学年末の書くことの指導の最終は、漢作文である。題目は自由、字数は二〇〇字前後、返り点・送り仮名をつけて提出する。漢作文を提出させるねらいは、漢文法のさまざまな約束ごとに則って、自

分の気持ちを表現させるところにあり、いわば一年間の漢文学習の総仕上げである。次に、二編紹介する。

猿日吉

M・Yさん

昔日尾張之地、有二男子一。名曰吉。皆呼レ猿、其如レ名、敏行敏才也。家雖二貧乏一、不レ屈、為二与レ皆戦遊一。於二是猿成長一、被レ遇二知或武将一仕。或武将織田信長事也。

或日、信長之家来調二林之木数一不レ能レ数。信長令二従者猿呼一。信長曰、「猿、何以為レ之也。」猿答曰、「先能用二意綱一、木々結。全結後、数取レ綱則能レ数二木之数一。信長感心、与二猿物一。

其後、日吉改名二秀吉一、為二信長之参謀一、多活躍。

不正心

H・Mくん

先日、吾於二学校一為二球技一、為二球所一当而負レ傷。吾所二以負レ之者、因吾掛二眼鏡一也。若人見レ之、寧当思二之偶然一。而事実異也。吾欲レ行二怠慢一、抜レ気。以却吾不レ可レ不レ通二病院一。夫人多見二逃小心不正一。而吾今負レ傷思、雖レ行不正小一、誰不レ招レ災而得二久和生一。古人曰、「天網恢恢、疎而不レ漏。」乃吾悟。運命者、人心映鏡也。然則、若吾自レ今願レ受二良運命一、即毎レ遭二全事正レ心、毎レ遇二全人一矯レ身、須四シ行三為従二良心一所レ命。

漢文を学習しはじめて六〇時間ばかり、しかもはじめての漢作文にしては、良好のできばえといえよう。有・雖・不能・於・所以・夫・而・毎などの語は正しく用いられているし、須の再読文字をはじめ、使役形・受身形・反語形・仮定形など多くの句法も恐れずに意欲的に用いている。また、話題も日常生活に取材したり、歴史上の人物に求めたり、豊かである。

それにしても、送りがなや返り点のつけ方、あるいは漢字の用法、文構造、句法等、添削すべき点は残されている。生徒たちは実作することによって、これらの問題点を改めて発見し、苦しみながら書きあげた漢作文に大きな意義を見いだしている。生徒の意志はできるだけ尊重し、文構造・送りがな・返り点を中心にして手を入れ、生徒に返却した。「猿日吉」は、次のようになって、生徒の手に渡った。

昔者、尾張国有二一男一。名曰二日吉一。世人以二其敏行敏才一称レ猿。家雖二貧乏一、剛直不レ屈。少好レ戦、善与レ友遊。及レ長、為二一武将所一レ遇。一武将者、織田信長也。

某日、信長家臣欲レ数二林木一、不能レ数。信長令二家臣一招二レ猿。信長曰、「猿、為レ之奈何。」猿対曰、「先備二万綱一、而結二之木一。結二綱万木一之後、取レ綱則能数二林木一。」信長称レ善、贈二之財物一。

其後、日吉改名二秀吉一、為二信長腹心一。大輔レ之。知二名於天下一。

七

漢文が国語科の一科目として位置づけられ、国語の力を養成する科目であるならば、漢文も書くことの領域を担当せねばなるまい。時間数の不足を嘆くことに終始せず、少ない時間数の中で、試行錯誤しながら、その道を切り開いていかねばなるまい。ここに報告した内容は、あまりに陳腐で未熟すぎ、一笑に付されるに違いない。が、書くことの学習指導を漢文教育の中に、明確に位置づけたいという願いから、あえてここに記した。

なお、本稿に記した内容は、漢文をはじめて履修した高校二年生に実践したものである。

（昭55・3・16）

（本学附属中・高等学校教諭）